

国際的な問題を身近にとらえる校外学習

植木節子¹⁾ 高橋博代²⁾

¹⁾千葉大学・教育学部 ²⁾千葉大学・教育学部附属中学校

A study on Enhancing Recognition of Global Issues through Supplementary Activities in Junior-high School

UEKI Setsuko¹⁾ TAKAHASHI Hiroyo²⁾

¹⁾Faculty of Education, Chiba University ²⁾Junior High School Attached to Chiba University

総合学習の授業では、生徒の「主体性」に対する過剰評価や理想化の傾向が指摘されている。本稿では、中学校の国際教育において、生徒の「主体性」に偏重しないよう、教師の積極的な働きかけを行ない、校外学習を中心に、国際的事象への視野を深める授業について考察した。

外国人との交流学习では、調べ学習によって準備した交流と、ぶっつけ本番で交流する2ケースに直面させた。生徒は予想外の場面や状況に困惑し、驚嘆し、格闘しながらも、発信能力を高めていくことが確認された。もう一つの校外学習である国連大学での体験学習は、生徒が国際的な問題に関心を持ち、より深い知識を得ようとするモチベーションを高めるのに有効であった。またその結果、生徒は紛争、貧困などの実態を多くの人に知らせたいと考え、身近な貢献の形を探して周囲に広めていこうとする発表につながった。

キーワード：国際教育 (International Education) 総合的な学習 (General Studies Method)
国際問題 (Global Issues) 中学校 (Junior-high school) 校外学習 (Supplementary Activities)

I. 問題の所在

1. 「主体性」重視への疑問

諸学校で行われる総合学習などの授業では、生徒の自律もしくは自立を追究する傾向が多く見られるが、子供の自主性に期待し、授業を展開すること自体には異論はないであろう。しかしこれまで展開されてきた授業の実際はどうかといえば、“教師との関わりや教材や学習環境と切り離して、子どもの関心や意欲や態度など、子ども自身の性向に「主体性」を求める神話”^{*1}であるとの指摘があるように、子供の意思に沿って行われる学習活動を過剰に評価し、理想化する傾向も見られる。授業の中で構成されている学習活動とその内容には、教師からの働きかけ、学習環境などがどれほど介在しているのか、その結果、学びとしてどれほど発展することができたかなどにおいては疑問が残るといえることである。

国際教育も総合学習の授業の一つとして取組まれることが多いが、外国人ゲストの話の流れに交流のゆくえを任せるもの、子供の外国に対する興味・関心の赴くまま、異文化を形成する諸要素や背景に触れずに雑然と展開されるものなどが見られる。このため授業で子供が取組む題材は、その時点で子供が持っている意識や関心の域内に留まり、物珍しい外国の事物、タイムリーな話題、センセーショナルな出来事に目が注がれる。

交流学习では、授業に招かれたゲスト個人の価値観に基づいた「異文化理解」が“成果”として習得される。経験的に浅くナイーブな子供は、それが異文化だと認識し、国際的な状況、問題を学ぶことができたという満足

感を抱く。子供たちが抱いたそのようなイメージや学習結果のとらえ方は、同じ教室で授業という活動を子供とともにする教師の中にも存在するのではないだろうか。

しかし国際教育の必要性を唱え、授業に取組もうとする教師は、何を学ばせようとして授業を行うのだろうか。おそらくは学習指導要領^{*2}の文言などを基に、広い視野から国際理解を深めることや、文化や人間の多様性を知り、受容や協調の精神を育てるなどを挙げるであろう。それなら何故、国際的な事情について知識・経験の少ない子供の「主体性」を過信するのだろうか。教師が授業に取組もうとした原点に立ち返れば、まだまだ国際的な諸事情に疎い子供たちに対して、より豊かな知識・経験を得る機会を提供し、自己の認識と他者を尊重する気持ちを育てることが目的ではなかったか。

そこで本稿では、中学校の国際教育において、生徒の「主体性」に偏重しない教師のあり方や、生徒の国際的事象に対する視野を深める授業について検討することを試みた。そして「共生」という名称でおこなわれている総合的な学習の時間の中で、校外学習として実施される活動を有効に機能させることに取組んだ。

II. 取組みの方針と計画

1. 生徒の関心とレディネス

これまで中学校の総合学習として、筆者自身も国際理解に関する授業を展開し、また他の幾多の授業観察も行ってきた。その中で調べ学習のテーマを選ばせるような時、生徒の興味・関心に任せて選択させると、取組み易そうなテーマ、タイムリーで目を引くテーマが選ばれ易く、その時点での生徒の知識レベルに依存した学習に

連絡先著者：植木節子

終わってしまう傾向が多く見られた。例えば異文化理解として食文化を扱う場合は少なくないが、自文化・他文化とも、その背景・民俗等について掘り下げる部分が少なく、外国人の調理したものを試食したり、特徴的で有名な料理や珍しいレシピを資料から転写し、発表会で紹介するなどが学習活動の多くを費やすことになる。

また外国人との交流活動による学習では、異文化を形成する価値観の根拠や、精神的要素に目を向けるよりも、外国人と接するという体験の珍しさ、民族衣装、歌舞、遊戯などを通してもたらされる“楽しさ”に生徒は魅了される。そして外国人が放つ異国の雰囲気に取り入れられ、交流相手のペースや関心に引き込まれてしまうと、生徒自身の学習ペースや当初抱いた関心を保持して授業を進めることが難しくなる。また生徒は（時として教師も）、異文化への表層的な興味が満足してしまえば、その先にある理解へのカギや、違和感をもたらす元となる要因に関心を向けることを忘れがちになったりするという可能性もある。

そのようなレベルに終始する傾向を改善するためには、調べ学習や異文化交流の形に工夫を加えることが必要である。そこで生徒の意欲や想像力を刺激し、実感に近い感覚で受け止め、より身近な問題に引きつけて考えられるような国際理解を目標に、学習活動の検討を進めることとした。

2. 実施方法および方針

対象とする中学校の総合学習では、当該年度は2回の校外学習を行うことができるカリキュラムであった。そこで第一段階に日常生活では接する機会の少ない他者、すなわち外国人を対象とした学習を、第二段階に日常の生徒の世界では考えることが少ない国際的な問題との接点を持つプログラムを計画した。

a. 校外学習1：留学生との交流活動

校外学習の第1段階では、“生きた異文化”としての留学生と対面することから始めた。生徒の視点や興味を広げる試みとして、自分以外の他者、特に異文化の背景を持つ他者に接することにより、生徒の日常では感じるものの少ない価値観、習慣などの存在を感じる交流の場を設定したのである。

多くの異文化交流に見られるのは、事前に交流相手国について書籍などの資料を用いて調べ、交流にあたっての予備知識を準備するなどの活動である。そうして学習した内容に従い当日の交流が実施されるという展開になるが、今回はそれに加え、生徒が準備した相手国以外の留学生とも、ぶっつけ本番の交流を行なった。その理由は、生徒が予め準備した内容や守備範囲を超えた活動をする事により、戸惑いと新鮮さを伴った異文化体験を味わわせようという趣旨であり、交流のアプローチを別の角度からさせることである。各自の当初の予想が裏切られるような場面で、どんな対応をするか、何が学習されるかなど、ハプニング的な場面での対処の仕方を観察・調査した。

そして生徒が知識的な学習ばかりでなく、コミュニケーションで留意すべき点、例えば相手にとっての分かりやすさとは何か、年齢や習慣の違い相手に対する気遣

い、交流に何を求めるか、言語的な障壁をどのように乗り越えるかなどを考えながら、異文化を理解しようとする意識を持って臨むよう、授業の流れを構成した。

b. 校外学習2：国連大学の活動を学ぶ

国際理解の授業実践では、国際的な事象や問題について考えると言っても、学習者の年齢に依存する壁の存在がある。たとえば中学生の体験、知識は決して豊富というわけにはいかない。しかし生徒が認識する「世界の姿」は、そうした体験、知識の範囲に依存して捉えられていると考えられた。

他方で交流活動をする場合、交流相手の外国人のプレゼンテーションやパフォーマンスなどに頼り過ぎれば、まだ“子供”である中学生は、大人である外国人の話を安易に信じたり、鵜呑みにする恐れも否定できない。

そこで第2段階として、生徒の日常では見られない世界、今躍動している「リアルな世界」を、より現実味を伴った形で体験させるべく、国連大学への訪問を設定した。

教師からは予め、国連広報センターのC氏に、国連について何を話して欲しいか、また知識レベルとしては基礎の基礎から説明することなどを要望として出した。

生徒にとって幸いなことに、C氏が中学校教師の前歴を持っていたために、中学生に対する対応や会話術にも長け、この年齢の生徒に接する豊かな経験を有することから、非常に分かりやすい説明、興味を引く内容が提供された。

生徒はC氏から、国連の概要（仕組み、成立など）、そこで扱われる国際的な問題（紛争、貧困、環境、人権、軍縮など）、国連に対する各国の見方等についてレクチャーを受け、それらを各自の調べ学習のテーマを決定するプロセスに役立てることとした。

c. 経過と発表テーマの決定

校外学習1では、小グループに分かれ、中国、韓国、エジプト、アメリカ合衆国、オマーン、ベトナム、バングラディシュの留学生、帰国子女（ニュージーランド）の学部生と話す活動が行われた。ローテーションにより、前もって準備した国の相手、そして当日ぶっつけ本番で話をする相手との2回の交流が展開された。

それらの活動を通して、生徒が記録ノートに書いた内容を見ていくと、次のようにして外国人との接し方に取り組んでいる様子が確認された。

まず調べ学習をした国の留学生に対しては、挨拶の言葉やネイティブの発音の仕方について詳しく聞いたり、礼儀、身分制度について聞くなどして、積極的に交流が進んだ。また留学生が「話しやすいように」配慮したり、「突っ込んだ質問」をしたり、「重要なことはきっちり聞けた」といった記述のように、調べ学習で準備したことによる効果もいくつか確認された。

調べ学習をせずに交流した相手に対しては、予期しなかった相手の前で緊張したり、なかなか話題が見つけれなかった生徒も中にはあったが、一般的に知られていることをもとに、なんとか話題にしていこうという姿が見られた。たとえば「物価」の違いや「料理」のように、相手からすぐに答えが得られて話を進めやすい話題。またちょうど開催されていた「上海万博」のこと、よく知

られた「一人っ子政策」について詳しい実情を訪ねるなどもあった。さらに、「ギャル」のようなファッションの傾向についてどう考えるか、といった価値観に関連するような質問や、「笑いのツボ」などの心理的なものにとらえ方について尋ねたりする生徒もあった。

交流活動全体については、「最初は緊張した」という感想がいくつか見られたが、やがて「だんだん慣れてきた」、「留学生と話すことは楽しい」と思うようになり、お互いに関心のあることを見つけられた時には「興味のあることは盛り上がった」と感じる事ができたようであった。

言語的な障壁については、「難しい言葉は、あまり通じなかった」とか、「Fさん（日本語初心者レベル）とはもう少しわかりやすく話した方が良かった」など、反省を交えながらの学習がなされ、「絵で説明したり、実際にやって見せたりしたらうまくいった」というような手ごたえを得た生徒、提示手法に長けた現職教員の留学生からiPadを使った説明を受けたことによって、多文化への具体的なイメージが湧き、「興味を持った」という生徒もあった。

このような活動や、自分たちの対応によって得られた成果に対し、生徒は「初回としては結構良い感じだった」という感触を持ち、2回だけの交流でなく「もっとたくさんの人と話したい」などの意欲、興味を示す感想を述べている。

校外学習2で生徒たちは、国連という名前やイメージは、授業で学習したりニュースなどで触れることはあるが、その活動について具体的な様子を知るところが少ないということに気付いた。国連大学の職員のレクチャーが終わり、国際問題に興味・関心が高まった時点で、同大学の図書館を見学し、書籍、インターネットにより関心事項を調べる活動をおこなった。

この2回の校外学習の後に生徒が設定したテーマは、国連の活動をもっと知ろう等から始まり、人種差別、貧困問題、レバノン内戦、朝鮮戦争、アフリカの内戦、難民、アパルトヘイト、イラクの情勢、飢餓問題、そして現代日本のグローバル化に至る内容となった。

発表会までの活動では、新聞記事を切り抜いたり、インターネット上の情報を引用したりすることから始めた。記事の内容に関しては、記事を書いた人の主張をそのまま受容するのではなく、中学生向けや一般の大人向けに解説されたニュース資料で、問題の経緯や論点についての知識を深め、そこに生徒なりの解釈を加えていった。また、たとえば差別問題にしても、外国で起きた遠いことと考えず、日本の中でも起こり得るというスタンスで捉え、身近なでき事などを織り交ぜた構成が工夫された。

このような経過を経て発表会が行われ、発表終了後に生徒自身の記述により、それぞれが学んだ内容、活動全体を通しての感想、今後の活動についてのまとめが行われた。つまり、生徒が自ら設定したテーマに対し、どのように取り組んだか、校外学習や発表会を通して何を学ぶことができたかなどを自己評価することとした。これによって、テーマの選択、課題解決に至るプロセスなどを検証し、生徒自身が、今後学習活動する際の見通しや改善の方途を探ることができるよう、自己変革の資料

としての機能を持たせようと考えた。

Ⅲ. 結 果

生徒（N=24名）は14のグループに分かれ、以下のようなテーマを設定した。

表—1

テーマ	
1	人種差別について
2	貧困から脱却するための目的と手段としての権利と能力
3	クラスター爆弾について
4	レバノン内戦について
5	朝鮮戦争について
6	アパルトヘイトについて
7	アフリカの内戦と難民数について
8	イラクの情勢について
9	飢えと日本人の考え方について
10	現代日本のグローバル化について
11	国連を知ろう
12	紛争から見る貧困
13	アフリカの貧困について
14	貧困の子どもたち

テーマの中で扱われた内容の分布は、

貧困：5（7）

紛争：6（13）

人種差別：2（3）

国連：（1）

日本：（1）

{※数値はグループ数、（ ）内は人数を示す}

となっており、うち1名が「貧困」と「紛争」の両方に重複したテーマを選択した。

この分布をみると、生徒は海外に存在する貧困、紛争に関心が高かった。つまり、日本にはない状況、現象に強いインパクトを受けたと考えられる。

1. 発表活動を終えての感想

a. 世界で起きている問題

世界各地の貧困問題、紛争などに対しては、「知ってほしい」「難民、貧困の人が助かればいい」という希望を抱く生徒が5名、「なくしたいが解決が難しい」となどと現実との狭間で悩む生徒が4名おり、理想や希望を抱く一方で、様々な現実的問題や現状を知ると、簡単に解決できないという事実と直面し、その難しさを実感している生徒の姿がある。

「残酷」「許せない」という感想を述べた2名からは、クラスター爆弾の実際の被害を知り、驚愕と憤りを禁じ得ない心情が見て取れる。

特にこれらのテーマでは、同年齢の子どもが置かれている状況を中心に調べているため、日本に暮らす今の自分の環境と比較しやすく、あまりにも異なる環境におかれた子供たちに感情移入がなされている結果であろう。

b. 国際社会の中の日本

日本の国際的位相に関わる内容を記述した生徒をみる

表一 2 発表を終えての感想

事柄		考 え ・ 希 望	テーマNo.
世界で起きている問題	戦争・深刻な問題	みんなに知ってほしい	6
	難民や貧困の人	助かればいい	13
	戦争・世界の問題	早く解決策が見つかるの良い	3
	紛争	なくしたいが解決が難しい	12
	世界の人々の考え方	共有するのは不可能	12
	国際問題	さまざまな問題があり簡単に解決できない	11
	国際問題	皆で一つの事に一生懸命にならない限り良くならない	11
	クラスター爆弾	たくさんの人を死に追いやるのは許せない	3
	クラスター爆弾	クラスター爆弾の残酷さ	3
世界（状況）		良くしたい	6
		平等な世界になればいい	13
日本	国際的地位	他国からの信頼があった	10
		国連に入る時の状況に驚いた	10
	他国との比較	国連に対する日本人の意識の低さに驚いた	11
		国連について知らせる必要がある	11
自分にできること	国際的な活動	面倒がらずに参加，協力したい	13
	「国際」	自分たちもその一つという気持ちを持つ	13
	クラスター爆弾	被害をなくすために解決策を見つけ伝えたい	3
	貧困	どんな手段を使っても手助けしてあげたい	2
	貧困	解決できるよう，自分も努力したい	13
	内戦	問題（の解決に）役立つよう努力したい	4
	貧困	自国は恵まれているからこそ貧困について考えなければならない	14
	貧困	自分たちが絶対に伝えなければならないと思った	14
	支援活動	チャイルドスポンサーシップ（手紙，資金援助が魅力）	12
気づいたこと	発表のしかたの問題	アドリブでは緊張し，混乱する，話が飛ぶ	8
		声が小さかった	8
		声が小さくて伝わらなかった	13
		PPと説明を合わせるのが難しい	3
	内容	全然知らなかった内容，出来事があった	3
		自分たちも聴衆にとってもためになった	3
		自分たちの生活を見つめなおすことが重要だ	14
		貧困の子供たちがこんなにもたくさんいる	14
		自分たちは恵まれた生活ができています	2
		コンゴ在住時のことを思い出し，危ない思いをしたことをみんなに伝えたかった	7
役に立った		国連大学で見つけた資料を書きとめたことが役に立った	2
苦勞した		情報を集めるのに苦勞した	4
反省	発表	引用グラフの出典を書くべきだった	10
		調べたことばかりの説明	3
		自分たちに何ができるかまで考えられなかった	3
		これからは見ている人に話しかけるように話したい	13
		次回は自分の意見をはっきり言い，聞く人に印象付ける	13
		PPの文と説明文の違いが難しい	3
聴衆から		反応から自分の発表が成功したと感じた	4
聴衆への影響		自分たちの発表から，考えるようになったらうれしい	14

と、国連という機関についての歴史や、日本が敗戦を経て加入するまでの事情の複雑さに「驚いた」とか、他国（実際は欧米諸国の資料を学習）と比較し、日本人の関心の低さに驚いている（2名）。自分の国のことだけに、国際的地位の微妙さや、国民的意識の不足している事実には、落胆する気持ちも大きいであろう。

そのような状況を受けて、他の人々に「国連についてもっと知らせる」という必要性や使命感のようなものを感じていると思われる。

他方で母国の国連での位置に肯定的な印象を持った生徒もある。C氏の話聞いて、日本の国際的貢献が、他国から信頼を得ているという結果を具体的な数値とともに知り、自信のようなものを感じているようであった。

c. 自分にできること

生徒は、前述したような情勢や国際的な問題を学習し、その中で自分たちにできることは何かを考えさせられる結果となったことが分かる。5名の生徒の感想は、「何かしたいと気持ちの上で強く願うものの具体策の提示には至らない」というレベルにとどまるが、「被害をなくすために、解決策を見つけ伝えたい」や「国際的な活動に面倒がらずに参加したい」などは、今まで遠くにあった国際的な問題に対して、強い関心を示すだけでなく、参加の意思も持ちえたという点で、国際理解への一歩を踏み出したと考えられる。

具体策を示した生徒2名は、支援活動として行われているチャイルド・スポンサーシップや、国境なき医師団の活動を紹介したことによって、支援の仕方の具体例とその効果を学び、それを聴衆に向かって提案しようとしていることが分かる。

その他、自分が恵まれていることに気づき、「恵まれているからこそ貧困について考えなければならない」という必要性や、貧困の子供たちの現状を「絶対に伝えなければならない」という使命感を抱いた生徒（2名）もあった。

ただし生徒が「恵まれている」と思ったこと、「恵まれている」ととらえた状況を考えて、自分の今ある環境の有難さを感じる事が大切な一方で、それが優越感と紙一重であることも、教師としては押さえて展開する必要があると思われた。

d. 発表の仕方について

発表に関する感想では、スキルの部分についての記述が多くを占めた。

たとえば「緊張したため声が小さかった」など反省を述べている生徒が4名ある。声の大きさのほか、パワーポイントの効果的利用方法についての反省、緊張の結果話が飛んでしまった生徒は、準備の必要を痛感したと思われる記述になっている。

発表するという活動を行うことによって、「自分たちの生活を見つめなおす機会になる」という重要性を見出した生徒が3名あった。日常では考えてもみなかったこと、すなわち「全然知らなかった内容」を学習できたこと、自分たちばかりでなく「聴衆にとってもためになった」と活動の効果に気づいた生徒もあった。

また自分がコンゴに住んでいたことを思い出し、今回の学習で「危ない思いをした体験」の背後にある歴史や

政治、経済の事情を知り、アフリカの内戦と難民の深刻な状況を聴衆に伝えたいと強く思った生徒もあった。

その他では、貧困から脱却するための手段を調べるといった作業をしていく中で、国連大学で見つけた資料を書きとめたことが有効であったことから、安易にインターネットに頼るのではなく、原本に触れることの重要性に気づいた生徒もあった。

f. 聴衆への意識

生徒が発信する方向から記述したもので、「見ている人に話しかけるように話したい」、「自分の意見をはっきり言い、聞く人に印象付けたい」などは、発表のスキルと同時に、聴衆という対象を明確に意識し、効果的に伝えるという“メッセージ”としての役割を認識した結果とみられた。

「聴衆の反応から自分たちの発表が成功したと感じた」、「自分たちの発表から、（聴衆が貧困の子供たちについて）考えるようになったらうれしい」などは、聴衆を通して成就感や発表の意義を見い出したり、確認しようとする視点を習得しつつあるように思われた。

g. その他

他方で「情報の集め方に苦労した」とか「引用文献の出典を書くべきだった」と記述した生徒らは、これまで書物を中心として調べることに不慣れであったが、今回の活動により、情報源を明示することや著作権などへ配慮する必要を学んだ。生徒がネット以外の資料に親しむことが少なくなっている現状においては、その結果生じる別の側面として、このような問題も起こりうることに、教師は留意を要すると考えられる。

生徒の反省として「調べたことばかりの説明になってしまった」や、「自分たちに何ができるかまで考えられなかった」と述べた生徒もおり、調べ学習に起こりがちな、発表会で説明することがゴールになりやすいという問題も依然として残っていること、しかし今回は自己評価を通して、そのような点に生徒自らが気づくことができたことも分かった。

2. 「できるようになったこと」

表—3の通り、生徒が一連の学習を通して“できるようになった”と感じた内容としては、理解と表現方法に関することに記述が多かった。

a. 理解に関して

理解に関連する記述から、多くの生徒は、自分でテーマとして取り組んだ内容について、よく理解できるようになったと考えている。

たとえば世界で起きている問題についての状況や知識を得て、“よくわかるようになった”と満足するものであり、中には解決策を考えるようになったとする生徒もあった。（4名）たとえば図—1のパワーポイントにあるような具体的支援を紹介した例である。

貧困を取り上げた4名に見られる特徴は、そのような生活状況にある人々に同情を寄せ、支援をしたいとか、解決策を考えなければならない気持ちを募らせている様子が見えた。

日本においては内戦などの紛争という状況がないため、これをテーマに選んだ生徒は、まずその定義、意味、原

表—3 できるようになったこと

	事 柄	テーマ		事 柄	テーマ
理解したこと		No.	提示・表現		No.
問題	世界で起きている深刻な問題	6	提示・表現	PPでは一番大事な単語を箇条書きにした	11
	世界の問題	8		PPを使えるようになった	3
	国連、諸問題の知識	9		PPを使った発表のしかた	2
	問題に対する解決策を考えることができる	3		画用紙にまとめる	8
貧困	貧困地域の支援策(チャイルドスポンサーシップ)を知った	12	提示・表現	声の大きさ、しゃべる速さに注意	10
	世界に貧困の子供たちがたくさんいること	14		時間配分	10
	世界中に苦しんでいる人がいること	2		文章を要約して書くこと	3
	貧困、世界で解決しなければならない深刻な問題	13		噛み砕いた言葉に直した	3
紛争	世界の現状(戦争、内戦)を知った	4	提示・表現	間をあげ、わかりやすく話す	4
	レバノン(地形、場所、内戦の原因・意味)	4		声の大きさ(聞こえるくらい)、はきはきと	4
	レバノン内戦について、環境の悪さ	4		様々な工夫、努力ができた	9
	内戦の原因、宗教間の問題などの知識	4		集中力を高めて発表	4
全般	協力することは人のためになる	13	提示・表現	グループで協力し、自分の役割を常に考えた	3
	世界への関心が増した	9		自分がどこを伝えたいか考えながら発表できた	14
	何をすべきかわかり、これからの生き方を理解	14		声を大きく、ゆっくりとした口調でできた	14
位相	日本の現状：平和ボケ、貿易国、国際状況	10	提示・表現	自分の言葉で簡単に(説明)することに努めた	14
	世界における日本の事	13		わかりやすいようにまとめることができた	4
外交	日本の外交について	10	提示・表現	聞きとりやすい声で発表できた	4
政治	どのように政治をおこなうか	4	聴衆		
事情	国際的な事情、価値観	9		いろいろな年齢層の人に話を聞いてもらう話し方	11
宗教	内戦の原因、宗教間の問題などの知識	4		誰が見てもわかりやすい資料	11
平和	平和について深く考えた	3		相手に理解してもらいやすい文の構成	11
視野				人にどう伝えるかを考え、姿勢がしっかりした	3
	物事を見る目を広げること(国内から世界へ)	12		相手に伝わるように意識して発表した	14
	さまざまな知識が増え、視野が広がった	9		どうしたら聴衆にわかりやすく伝えられるか考えた	13
	問題に対する自分の意見を持つことができる	3		地図、絵、PP効果をつかった	14
	国際問題を幅広く見ることで新たな事が見えた	2	改善したこと		
	物事をいろいろな視点から見るができる	2	できるだけ大きな声で発表	13	
	(国際的な視野で)平等にもものを見る	9	アドバイスにより、説明を加え、2回目の方が改善	3	
調べ方・準備			アドバイスにより、2回目の方が充実した	2	
	インターネットを使った情報収集	4	工夫		
	インターネットを使って写真や資料を集めることができた	14		外国の人と身振り手振りで話ができるようになった	14
たくさん準備をすればいい発表になると信じてやった	14	外国の人との関わり方を教わった		2	
説明(内容)	イラク国民・イスラム教徒の種類	8		外国の文化、宗教を意識して会話できるようになった	7

チャイルド・スポンサーシップ
 国際NGO world visionが行っている、途上国の子供が未来への希望をもち、健やかに成長できるよう1日あたり150円、月々4,500円の支援によって支援地域の貧困の解決を目指す取り組み。
 チャイルド・スポンサーシップにはいり、チャイルド・スポンサーになると、支援地域に住む子供“チャイルド”が一人紹介され、その子供と文通をしたりプレゼントを贈ったりすることができる。
 また、チャイルドが住んでいる地域に行き、会うこともできる。

図—1 生徒のパワーポイントより

因をしっかりと刻んだとみられる。と同時に、紛争の悲惨さ、爆弾の引き起こす結果の残酷さ、さらにそれらの原因となるもの、例えば国のおかれた地理的背景や歴史的経緯、そして宗教間の問題を強い印象と共に学んだことが分かった。

現代日本について考察し、世界の情勢の中でどのようにすべきかという提案をした生徒からは、その国際的な位置・役割や、世界的に見た日本の価値を客観視した上で、日本人の価値観に対して警鐘を鳴らすような意見も発表された。

また抽象的ではあるが、世界的な規模で取り組むべきこと、たとえば「国際協力」、「世界貢献」などのほか、世界へまず関心を向けることの大切さを記述している。

b. 生徒の視野について

7名の生徒が、自らの視野に変化があったことを記述している。まず発表までの過程を通して、自分の「ものを見る目」、「視野が広がった」と感じている。

また国際的な立場から「平等にもものを見る」こと、諸問題に対して自分自身の「意見を持つ」ことができるようになったと書いた生徒もある。

このように様々な知識が増え、多様な視点からものを見られるようになったということは、自分以外の他者を捉えるための第一歩であり、異文化を理解していく上で

重要なことである。但しその対象となるものは、「物事」「いろいろなこと」というような抽象的表現や漠然とした感覚で捉えている可能性があり、もう一歩進んだ記述、具体的な事例として表現されてはいない。

生徒が自分のテーマに沿って「視野が広がった」と書いているとすれば、何がどのように広がったのかを、もっと具体的に教師との間もしくはグループ相互で話し合い、確認し、発展的なディスカッションや、調査を深めていく足掛かりを作っていく必要があるだろう。

c. 提示・表現について

生徒が「できるようになったこと」と考えている中では、提示方法や表現の仕方についての記述が最も多く、それは発表活動の中ですぐに結果を実感できるためでもある。

一つには聴衆を通して気づかされた内容であり、もう一つには2回の発表の間の時間に、指導者である担任やアドバイザーの教師により、指導・助言が行われたために生徒が気づいた内容である。この効果は、後述する「改善」や「工夫」したことにも同様のことが言える。

ほとんどの項目が、聴衆の反応を通じてもたらされたとみられるが、特に「いろいろな年齢層の人」、「誰が見ても」、「相手に」、「聴衆に」、「人にどう伝えるか」などは、強く対象を意識した言葉である。

それらは発表をしながら徐々に気づいていったこともあるが、それ以前に留学生と交流する活動の中で、目の前にいる具体的な対象を意識して話すという経験を持ったことにも因る。

技術的な点では、「声の大きさ・速さ」などについて「大きくゆっくり」、「はきはきと」、「間をあけて」など話し方に関するもの、提示物の中の地図、絵などを見やすくすることや、パワーポイント上の視覚効果を有効に活用することなどが挙げられている。

さらに提示内容のまとめ方について、「要約」の仕方

や「箇条書き」、「噛み砕いた言葉」の選択、「自分の言葉」などという表現からは、資料の書き写しや、借り物の言葉のまま説明しないという姿勢を身につけつつあることが分かる。

こうした技術や姿勢の必要性に気づいたことは、自分の言葉を相手がどのように受け止めるのかを考えるようになったためであろう。つまり相手に自分の言いたいことをきちんと伝えたいという気持ち、そして相手にとっても良く分かるようにしたいという欲求を抱くようになり、これを実現する手段を模索した結果ではないだろうか。

そのほかに「集中力を高めて」発表に臨むとか、グループ内での協力の大切さ、自分の役割を果たせた満足感に触れた生徒もあった。

d. 調べ方・準備について

発表までの準備段階でできるようになったことは、インターネットのいろいろな利用法であり、情報収集の仕方である。また入念な準備をすることによって良い発表につながることに気付いたという記述もあった。

生徒はこれまでコンピュータ等の情報機器を使っているが、国際的な問題を意識的に取り上げ、発表会のために十分な資料を準備するには、情報源をどこに求めたらよいか、どんな資料を集められるか、何が発表に有効か、どんな提示が効果的かなど、今回の活動を通して改めて分かったと感じ、具体的な方法が習得できたと受け止めている。

3. 「今後取り上げたいテーマ」

次年度に取り上げたいテーマは何かという質問に対して、同じテーマをより深く探求したいとする生徒が4名。その内訳は今回「レバノン内戦」を発表した2名、また「貧困の子供たち」を発表した生徒2名は3年次であり、これから卒業して高校生になっても続けて学習したいと

表—4 今後取り上げたいテーマ

	取り上げたいテーマ	発表したテーマ
同テーマを深く	内戦（テーマ）をより深く追究	4
	貧困について：毎日のニュースを見て感じて自分の意見を考える	14
	同じテーマについて（高校でも）調べたい	14
	宗教間の問題、歴史	4
日本文化	日本古来の和（の文化）	10
	世界を通して何か（お菓子など）を見る	12
	日本から世界を見る：お菓子を通して	13
日常／身近なこと	もっと身近で深いこと、自分に影響を及ぼす事	9
	日々の疑問、日常に密着したこと	3
国連	国連について：毎日のニュースを見て感じて自分の意見を考える	14
	国際（国連）について	7
異なる国際問題	北朝鮮対韓国（砲撃がニュースで話題を集めた）	4
	レバノン以外の内戦	4
世界各国	（音楽の違い）	3

いう意欲を示すものであった。

次に「日本の文化」について調べたいとする生徒が3名おり、古来の“和の文化”，お菓子などを通して世界と日本を比べてみたいとするものであった。

「日常のこと」，「身近なこと」を調べたいという生徒が2名。その理由として、今回はクラスター爆弾や飢餓など海外に存在する問題を選んだが、それらの国際問題を調べる中で、改めて自分の置かれた環境や身の回りを振り返ることができ、自分たちの生活に影響を及ぼすこと、日々の疑問、もっと日常に密着したことについて調べたいと書いている。

また「国連について」という回答が2名おり、今回の学習に端を発し、これからも毎日のニュースを見て自分の意見を持つようにしたいというもの、国際的な事を国連という窓から見たいというものであった。

その他では、今回と違うテーマで国際的な問題を考えたいという生徒が2名あり、例えば北朝鮮と韓国の関係、レバノン内戦以外の内戦などの内容について、もっと地域を拡大して調べたいとするものであった。

IV. 考 察

生徒の発表会までの活動に、交流活動と国連でのレクチャーという2つの校外学習がどのように機能したかを見ていきたい。

まず外国人との交流活動では、不慣れな形態(異文化)でのコミュニケーションをする中で、ゲストとの間にある言語的なギャップから学んだことが挙げられる。例えば相手の日本語レベルに配慮する必要を感じ、試行錯誤しながら学ぼうとしている。そして漠然と「相手分かりやすいように話す」というイメージを抱くのではなく、分かりやすさの中身が何であるかを、直接的、体験的に掴もうとしている。また視覚的な効果については、何をどのように使っていくと良いかを、具体的な状況の中で確認しながら、コミュニケーションを図っている様子が見られた。

また調べ学習による準備を生かして十分に話したいことを話せたという成果や、調べ学習などの準備ができない場合——現実の異文化接触ではむしろこのようなケースの方が多いであろう——では、“異文化”とどのように接すればよいかについて、自分の知識を駆使し、臨機応変に対応する方法を、実践の中で徐々に習得する姿があった。

次に国連大学での学習による影響についてみると、それまで生徒が漠然とした形で興味を抱いていた“世界の姿”が、世界の紛争や貧困などの様々な現状を知ることによって具体化された。その中でも生徒が最も印象付けられた内容によって、テーマが決定されていることが分かる。と言っても、単に国連職員から聞く話の珍しさに惹かれたのではなく、生徒の日常で国際的なできごとに関心・関心が薄かったことを自覚したことが発端であり、自分たちも何らかの形で支援に加わりたいが、どうしたらよいか分からないという気持ちが、もっと深く調べなければならないという、学習活動の推進力になっている。

また発表会までの学習を終えた時点では、生徒は国際

的な事象に新たな興味を抱き、ある者は同じテーマの掘り下げを、またある者は別の国際問題に取り組みたいと考えている。そして国際的な問題も、日常的なレベルとして身近に、そして継続的に捉えていくこと、例えば毎日のニュースなどに関心を持ち、自分自身の意見を持つことなどが重要であると考えようになった。

今回の校外学習によって生徒が習得したことの中で、発表そのものがゴールでなかったことは重要である。「何のために発表するか」という目的が、「自分の決めたテーマについて調べ、発表会によって学習が終わる」というのではなく、校外学習によって生まれた感情をもとに、各自が使命感に近い意識を抱いて発表する場を求め、発表会に臨んだということにある。

生徒にとって発表会の位置付けは、世界に起きている現象、国際的な問題の深刻さを、他の生徒や発表を聞きに来る聴衆に伝えようとするモチベーションから始まっている。さらにそれらの諸問題を知って何か自分たちにできることはないかと考え、実行する方法を見いだそうとし、得られた答えを他者と共有することが目的となっている。

生徒の日常生活では想像しにくい国際的な諸問題を、国連での校外学習によって、間接的にせよ体験し、さらに自主的なテーマ選択と調べ学習をもって、発表内容に深みと厚みを加えるというステップを踏んだことは、今回の校外学習が一定の効果を生んだと言えよう。

そこから得た知識や思考をもとに、自分の見解を持ち、「自分たちにできること」について考察したことは、校外学習が単なる間接体験ではない位置を占め始めていると考えられ、今回の試みの中で、最も注目できる結果の一つであった。

他方で全活動を終えての感想の記述が、生徒によって必ずしも具体的あるいは詳細な内容に触れていないことに関しては、配布した質問紙の形式・表現が漠然としていることも一因とみられる。すなわち記入する生徒の方も、詳細な記述が求められていると思わずに書いている可能性である。またその他の要因として、生徒の中には、それほど具体的なイメージを持っているわけではないという場合も考えられた。

また国際支援を考えると、支援の対象とする人々に「恵まれない」という判断を安易に下すことのないように、つまり困難な環境におかれた他者と自分との関係を、優劣のスケールを持って測らない、というものの見方を育まなければならない。たとえば「恵まれない」というイメージや感情を抱くような自分の中の判断基準、先入観の発露を分析的にとらえる必要があり、そういった視点をどのように持たせるかは、これから発展的な国際理解に結び付けていくうえで、難しいが不可避の課題であると思われた。

V. ま と め

国際理解教育の中では“豊かなコミュニケーション能力”という言葉がキーワードとして登場する。日本人特有のノンバーバル・コミュニケーション、それによって生ずる表現力の乏しさ、自己表現力・主張における消極

性、抽象性などを問題として、これをどう改善していくかが取組まれる。確かにこのような特徴は、国際社会の中でもよく話題になるところであり、これが日本人の能力の評価においてマイナスに働く一因と言えよう。ただ、授業の中でどう扱い、どのような能力の育成に取り組んでいくかを考える時、“多様な価値観を大切にする”というお題目や、日本人のhigh-context communicationという文化特性ばかりを論じているわけにはいかない。

そのような意味においても、異質な相手と向き合い、相手の話に耳を傾ける活動は、自己がどのような形・特徴を有しているかを自覚し、自分の考えをどのようにすれば確かに相手に伝わるか、相手の言いたいことを理解するためには何が必要かなどについて直視することを余儀なくさせられる。今回の活動で、少しずつではあるが、生徒は予想外の場面や状況に困惑し、驚嘆し、格闘しながらも、交信能力を高めていくことが確認された。

第2の校外学習として行なわれた国連大学の講義を受ける等の体験は、生徒が新しい知識を得ようとする動機付けに有効であり、それまでの視点よりも広範な見方を身につけることにつながった結果、世界の平和に貢献しようという生徒のモチベーションを高めた。

他方で、クラスター爆弾やアフリカの貧困などのように、生徒たちの意識の上で“遠い国”の問題であるテーマであっても、資料を集めてまとめれば、ある程度発表会に耐えられる形に整えることは可能である。しかし一般的・平均的な中学生の知識・体験を超える内容については、生徒にとって「決して他人事ではない」と認識するまでに相応の時間が必要である。

発表後のまとめの記述から、生徒は本心から充実感、成就感、自己肯定感をもったであろうことが推測された。しかし発表会以後の活動として、それぞれの詳細な内容についてさらに確認し、分析し、議論し、発展させるといった段階まで行うには、スケジュールがタイトすぎるというのが現状であった。

授業展開の中で、どうしたら生徒たちの国際感覚を磨

き、より現実に迫るような想像力、理解力を養う活動を提供できるか、今後も検討していかなければならない。

〈参考文献〉

1. 佐藤学：『授業を変える学校が変わる 総合学習からカリキュラムの創造へ』小学館，2000. 8
2. 文部科学省：『中学校学習指導要領』2008. 9
3. 田中耕治編著：『「総合学習」の可能性を問う』ミネルヴァ書房，1999. 12
4. 植木節子 高橋博代：『国際教育の進め方に対する一考察 ―“共生”における生徒の活動を通して―』千葉大学教育学部研究紀要第59巻 2011. 3
5. 奥田眞丈 牧昌見 伊藤和彦編著：『シリーズ学校改善とスクールリーダー 特色ある学校を創る10「国際感覚を育む」』東洋館出版社，1993. 3
6. 植木武編著：『国際理解教育のABC―図と写真で見える総合的な学習』東洋館出版社，2002. 8
7. 池上彰：『国際問題がわかる！世界地図の読み方』小学館，2009. 12
8. 池上彰：『これで世の中わかる！ニュースの基礎の基礎』大和書房，2006. 2
9. 池上彰：『1テーマ5分で分かる世界のニュースの基礎知識』小学館，2010. 3
10. 池上彰：『そうだったのか！池上彰の学べるニュース』海竜社，2010. 8
11. 村上重良：『世界の宗教』岩波ジュニア新書，1980. 3
12. 佐藤郡衛 林英和編『国際理解教育の授業づくり』教育出版，1998. 3
13. 中西晃編著：『国際教育論 ―共生時代における教育―』創友社，1993. 3
14. 川端末人 多田孝志編著：『世界に子どもをひらく』創友社，1990. 5